

視覚障害者スキーの現状と課題
ーブラインドスキーサミット 2015 の開催を通してー
**Current Status and Issues of Skiing for Persons
with Visually Impairments**
-A Report from the Blind Skiing Summit 2015-

矢部 健三（神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢自立支援ホーム）

串田 直樹（かながわブラインドスキークラブ）

Kenzo YABE (Kanagawa-ken General Rehabilitation Center, Nanasawa Self-Reliance Support Homes)

Naoki KUSHIDA (Kanagawa Blind Ski Club)

要旨：

目的：視覚障害者スキーの現状と課題を明らかにする。

方法：5団体の参加を得て「ブラインドスキーサミット 2015」を開催、活動実績、誘導方法、晴眼スキーヤーの募集方法等の情報を交換。

結果：2団体が1980年代から活動を開始、他3団体も2000年前後から活動。誘導は、いずれの団体も後方からが中心、視覚障害者の希望によっては前方からも実施。4団体が曲がる方向を指示、1団体は、曲がるタイミングを「ターン」などの掛け声で指示。誘導用具は、3団体でワイヤレス式インカム・ヘッドセットやハンズフリー拡声器を使用。全ての団体が視覚障害者であることを知らせるビブスを着用。晴眼スキーヤー募集は、過去の参加者や口コミが中心。2団体では、社協を通じて地元スキーヤーの協力も得ていた。

結論：各団体の共通の課題として、晴眼スキーヤーの不足や高齢化が明らかになった。今後も情報交換を継続し視覚障害者のスキー環境の充実・発展に繋げていきたい。

キーワード：視覚障害者スキー、スポーツ、レクリエーション

1. 目的

視覚障害者がレクリエーション・スポーツをしたいと考えたとき、その選択肢や機会は限られ、視覚障害者のレクリエーション・スポーツ環境はまだ充実しているとはいえない。このような状況の中で、いくつかの団体で視覚障害者のアルペンスキーが行われてきた。

本稿では、かながわブラインドスキークラブの設立30周年記念事業として開催した同種の団

体による情報交換会「ブラインドスキーサミット 2015」について報告し、視覚障害者スキーの現状と課題を明らかにする。

2. 方法

2.1. 参加団体

「ブラインドスキーサミット 2015」に参加したのは以下の5団体である。

- (1) かながわブラインドスキークラブ（神奈川、以下「KBSC」）



図1 ブラインドスキーサミット2015での集合写真

- (2) シー・ハイル (東京、以下「SH」)
- (3) だいすきクラブ (神奈川、以下「DSC」)
- (4) TABS (Tokyo Association for Blind Skiers、東京)
- (5) ミツ星山の会 (富山、以下「MY」)

2.2. 開催日時

2015年10月3日(土) 13:00～17:00

2.3. 開催場所

神奈川県ライトセンター

所在地：横浜市旭区二俣川1-80-2

2.4. 調査方法

事前に面接による聞き取りを行った他、調査票として発表用スライドのフォーマットを配布し、必要事項を記入してもらった。

当日は、それをもとに各団体10分程度でプレゼンテーションを行い、その後質疑応答を行った。

2.5. 調査内容

各団体の沿革、組織運営、活動状況、スキー誘導法、晴眼スキーヤーの募集・育成法、課題等

3. 結果

3.1. 各団体の沿革

3.1.1. KBSCの沿革：神奈川県ライトセンターを拠点に活動するボランティア団体、神奈川県視覚障害援助赤十字奉仕団が1980年から毎年開催していた行事「ブラインドスキー」が母体である。その参加者が中心になり、1985年に「神奈川県視覚障害スキー協会」を設立した。その後、2001年に「かながわブラインドスキークラブ」に改称して現在に至っている。

その後、2001年に「かながわブラインドスキークラブ」に改称して現在に至っている。

3.1.2. SHの沿革：1976年から葛飾盲学校(当時)が実施していた「雪国教室」が母体である。卒業後もスキーを楽しむ機会を持つ目的で、同校卒業生が1986年に「シー・ハイル」

を設立した。

3.1.3. DSCの沿革：神奈川県スキー協議会が1983年から開催している「神奈川障害者交流スキー」が母体である。それに参加していた視覚障害スキーヤーが中心になり1999年に「だいすきクラブ」を設立した。クラブ設立時には、KBSCの協力を得てブラインドスキーの誘導技術を導入した。

3.1.4. TABSの沿革：東京都盲人福祉協会青年部が、KBSCの協力を得てブラインドスキーの誘導技術を導入し、1995年から主催していたスキーツアーが母体である。その参加者が中心になり、2003年にTABSを設立した。

3.1.5. MYの沿革：富山県の障害者の登山活動を支援するボランティア団体として、1999年に「ミツ星山の会」を設立した。2003年に新潟あいゆー山の会及び高田盲学校の協力を得てブラインドスキーの技術講習を行い、翌2004年からツアーを開催している。

3.2. 各団体の組織運営

表1に各団体の会員数等を示した。役員会を組織していた団体は3団体、会務とツアー運営を分けていたのは2団体であった。

表1 各団体の会員数等

	KBSC	SH	DSC	TABS	MY
設立	1985	1986	1999	2003	1999
会員	97名 B36S61	33名 B27S6	18名 B13S5	110名 B40S70	150名 B40S110
会費	¥2,000	—	¥6,000	—	¥2,000

※表中の「B」は視覚障害スキーヤー、「S」は晴眼スキーヤーを表す。会員数は、2015年4月現在の概数。

3.3. 各団体の活動状況

表2に各団体の活動状況を示した。

表2 各団体の活動状況

	KBSC	SH	DSC	TABS	MY
ツアー	年2回	年1回	年1回	年3回	年1回
場所	1月 岩原 2月 尾瀬岩鞍	3月 戸隠	2月 木曾福島	1月 浅間 2月 妙高 3月 裏磐梯	1月 立山山麓
会報	年3回		年4回		

シーズン中のツアー開催回数は、TABSの3回が最も多く、KBSCの2回がそれに続いた。他の3団体はいずれも1回の開催だった。ただし、SHはアルペンの他にクロスカントリーのツアーを1回開催している。各団体とも、会員相互の交流や体力維持などを目的に、懇親会や研修会、レクリエーションなども開催していた。会報を定期的に発行しているのは、2団体だった。SHでは、1991年暮れフランス・ティニューでスキー交流を、1997年1月、スイス・サンモリッツ盲人スキー学校で研修も行ってた。

3.4. 各団体のスキー誘導法

表3に各団体のスキー誘導法等を示した。

誘導ペアは、原則視覚障害スキーヤー1対晴眼スキーヤー1とするのが2団体、晴眼スキーヤーの参加数や視覚障害スキーヤーの見え方、スキー技能によって1対1もしくは1対2とするのが2団体、原則1対2とするのが1団体だった。滑走前にはどの団体も、コースの状況（斜度、コース幅、コース両側の状態、雪質、混み具合など）を晴眼スキーヤーから視覚障害スキーヤーに説明していた。

表3 各団体のスキー誘導法等

	KBSC	SH	DSC	TABS	MY
ペア	B1S1～2	B1S1	B1S1	B1S2	B1S1～2
誘導	後前 前前	後前 前前	後前	後前 前前 前後	後前 前前
指示	方向等	方向等	方向等	タイミング等	方向等
用具	WIHS HFS ビブス ヘルメット	ビブス	WIHS HFS ビブス	HFS 鈴 ビブス ヘルメット	ビブス

※表中の「後前」は後方前向き誘導法、「前前」は前方前向き誘導法、「前後」は前方後向き誘導法、「WIHS」はワイヤレス式インカム・ヘッドセット、「HFS」はハンズフリー拡声器を表す。スキー誘導法は、今回調査対象とした5団体では、4団体が後方前向き誘導法¹⁾を中心にしてたが、TABSでは視覚障害スキーヤーの前後を晴眼スキーヤーが滑り、視覚障害スキーヤーの希望で前方前向き誘導法²⁾や前方後向き誘導法³⁾、後方前向き誘導法を自由に選ばせていた。その他の団体でも、視覚障害スキーヤーの保有視力によって、前方前向き誘導法を使用する者

がいるとのことだった。指示内容は4団体が曲がる方向だったのに対し、TABSは、とっさの指示の際に視覚障害スキーヤー・晴眼スキーヤーに左右を間違えてしまうことが多いとの理由で、曲がるタイミングを「ターン」などの掛け声で知らせていた。

誘導に使用する用具としては、3団体でWIHSやHFSを使用していた。これらの機器を現在使用していない2団体も、機器使用を試行した経験はあるが、滑走中の風切り音やハウリングで十分な効果を得られなかったとの報告がなされた。これに対し、現在機器使用中の団体からは、風切り音やハウリングの防止方法として、ウインドスクリーン（スポンジ製のマイクカバー）を装着する、咽頭マイクを使用する、電池残量が少なくなるとハウリングを起こしやすいので使用時以外はこまめに電源を切るなどの助言がなされた。また、HFSの使用は、周囲への注意喚起にも役立つとの指摘が複数なされ、推奨機種として、TOA（株）のVOICE WALKER ER-1000や（有）南豆無線電機のパワギガS NZ-671-Bなどが紹介された。TABSでは、前走の晴眼スキーヤーはHFS以外に鈴、ストック等も誘導のための音源として使用していた。また、安全のためにTABSとKBSCでは、視覚障害スキーヤーにヘルメットの着用を義務付けていた。その他、全ての団体で注意喚起を目的に、視覚障害スキーヤーの団体であることが周囲にわかるようなビブスを着用して滑走していた。

3.5 各団体の晴眼スキーヤー募集と育成法

3.5.1. 晴眼スキーヤーの募集：晴眼スキーヤー募集は、会員や過去の参加者、口コミがどの団体でも中心だった。ポスター掲示やチラシ配布、HPやSNS利用は3団体が実施していた。また、DSCでは神奈川県スキー協議会の機関紙を活用して晴眼スキーヤー募集を実施している他、TABSとSHでは、ツアー会場付近の社会福祉協議会を通じて地元スキーヤーの協力も得ていた。

3.5.1. 晴眼スキーヤーの募集：晴眼スキーヤー募集は、会員や過去の参加者、口コミがどの団体でも中心だった。ポスター掲示やチラシ配布、HPやSNS利用は3団体が実施していた。また、DSCでは神奈川県スキー協議会の機関紙を活用して晴眼スキーヤー募集を実施している他、TABSとSHでは、ツアー会場付近の社会福祉協議会を通じて地元スキーヤーの協力も得ていた。

3.5.2. 晴眼スキーヤーの育成：スキー誘導を担う晴眼スキーヤー育成は、各団体ともツアー当日に初参加者を対象に雪上研修を実施している。また、TABSやSHはビデオも利用し、

3.5.2. 晴眼スキーヤーの育成：スキー誘導を担う晴眼スキーヤー育成は、各団体ともツアー当日に初参加者を対象に雪上研修を実施している。また、TABSやSHはビデオも利用し、

往路のバス車内などで研修を行っている。DSCでは、神奈川県スキー協議会主催の研修会を利用して、晴眼スキーヤーへの研修を実施している。

3.6. 各団体の課題

現在の課題としては、いずれの団体も晴眼スキーヤーの不足と参加者の高齢化を挙げていた。また、WIHSやHFSなど共有備品の購入費や、晴眼スキーヤーのリフト代などの補助費、役員・実行委員の活動費等、資金の不足をあげる団体も3団体あった。その他に、晴眼スキーヤーのスキー誘導技術向上を上げた団体も2団体あった。

4. 考察

各団体の沿革では、スキー誘導法の技術導入に当たって、KBSCや盲学校の協力を仰いだことから、KBSCや盲学校が視覚障害者スキーの普及に大きく貢献してきたことが明らかになった。

スキー誘導法としては、渡辺ら(1995)や佐藤(2010, 2011)が様々な方法を紹介しているが、今回調査対象の5団体では、後方前向き誘導法や前方前向き誘導法が中心だった。これは、各団体が一定程度の滑走技術を有する者が集まって活動するという。団体の性質によるものと思われる。

現在の課題としては、各団体共通のものとして、晴眼スキーヤーの不足や参加者の高齢化が明らかになった。視覚障害者スキーにとって、晴眼スキーヤーによる誘導は、マラソンの伴走者やタンデム自転車の同乗者のように、必須であるが、スキー人口の減少、費用負担(交通費や宿泊費等)、拘束時間の長さなどが、晴眼スキーヤーの不足に影響しているものと思われる。各団体ともこれを重要な課題と認識しているものの、効果的な解決策は見いだせていない。

今後は、今回明らかになった課題の改善に取り組むとともに、情報交換を継続して視覚障害者スキーヤーのスキー環境の充実・発展に繋がっていききたい。

謝辞

今回のかながわブラインドスキークラブ設立30周年記念事業「ブラインドスキーサミット2015」の開催に当たり、リコー社会貢献クラブFreeWillから多額のご寄付をいただいた。また、シー・ハイル、だいすきクラブ、TABS、三ツ星山の会の皆様には、「ブラインドスキーサミット2015」への参加並びに発表に快くご協力いただいた。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

註

- 1) 図2のように、晴眼スキーヤーは視覚障害者スキーヤーの後方に位置し、視覚障害者スキーヤーと同じ方向(進行方向)を向き、音声で誘導する方法。晴眼スキーヤーはゲレンデの状況と視覚障害者スキーヤーの動きを絶えずチェックすることが可能で、ある程度以上のスピードで滑る場合には安全で効率的な誘導法といえる。

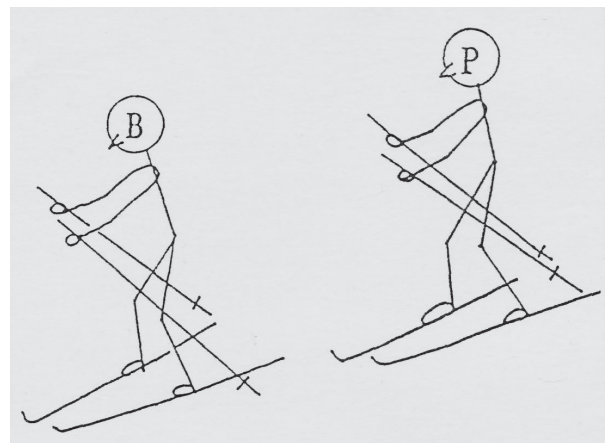


図2 後方前向き誘導法 (渡辺ら、1995)

※図中の「B」は視覚障害者スキーヤー、「P」は晴眼スキーヤーを表す。

- 2) 図3のように、晴眼スキーヤーはロービジョンの視覚障害者スキーヤーの前方に位置し、視覚障害者スキーヤーと同じ方向(進行方向)を向き、視覚障害者スキーヤーが晴眼スキーヤーの姿を視覚で確認しながら誘導する方法。晴眼スキーヤーは、時々振り向いて後方を滑る視覚障害者スキーヤーを確認しなければならず、

視覚障害スキーヤーが遅れたり、転んだりした場合の対応が難しい。そのため、後方にも補助としての晴眼スキーヤーを配置することが望ましい。

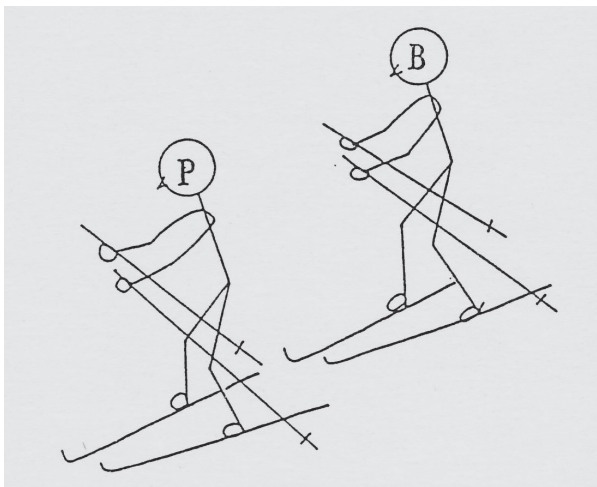


図3 前方前向き誘導法 (渡辺ら、1995)

3) 図4のように、晴眼スキーヤーは視覚障害スキーヤーの前方に位置し、視覚障害スキーヤーと同じ方向(進行方向)を向き、音声や鈴などの音で誘導する方法。晴眼スキーヤーは、振り向きながら後方を滑る視覚障害スキーヤーを確認しなければならず、高度の技術を要求されるうえ、視覚障害スキーヤーが遅れたり、転んだりした場合の対応が難しい他、急な斜面や荒れた斜面、混雑したゲレンデな

どでは困難な誘導法といえる。そのため、後方にも補助としての晴眼スキーヤーを配置することが必須である。

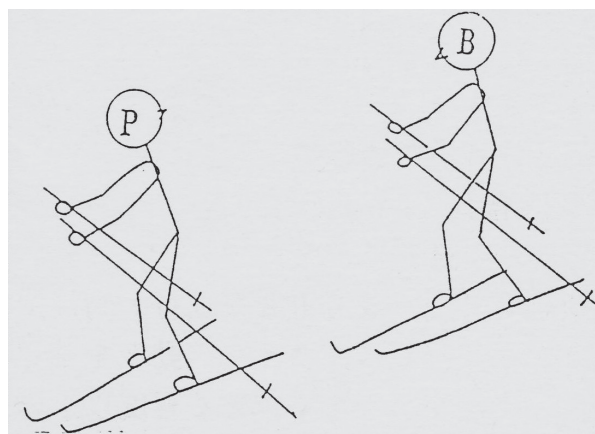


図4 前方後向き誘導法 (渡辺ら、1995)

文献

- 1) 佐藤紀子 (2010) 視覚障害スキーヤーを対象としたスキー指導. 日本大学歯学部紀要, 38, 115-121.
- 2) 佐藤紀子 (2011) 視覚障害スキーヤーに対するスキーガイド方法. 日本大学歯学部紀要, 39, 85-89.
- 3) 渡辺文治・白崎正彦・増田良一・間嶋和子 (1995) 視覚障害スキーヤーのスキー誘導法. 視覚障害リハビリテーション協会紀要, 2, 16-22.